

# 静中・静高 関東同窓会 会 報

十周年に寄す

高き理想を

仰ぎ見て

同じ心に

集み来し哉

至誠の色の

燃え出でて

清明心に

歩み来し哉

伝え来し歌

高らかに

未来の十年

進み行く哉



新年顔合せであいさつする宮澤会長（右端）。

静中・静高関東同窓会  
 会報 第17号  
 昭和59年 6月29日発行  
 編集人 月見里得知郎

## その後の同窓会活動

### ◆幹事会

- ・ 58年12月7日（水）18時より
- ・ 新宿NSビル8F、トップバンム
- ・ ア会議室にて
- ・ 出席幹事 40名

- ・ 会報16号発送および年会費未払出者に納入依頼書発送をお願い。
- ・ 来年は創立10周年、記念行事の提案を求める。
- ・ 今後の幹事会で適宜、同窓生を講師に懇話会を開くこととする。

- ・ 秋のリクリエーション、11月23日・子の権現ハイキングの報告。

### ◆新年顔合せ

- ・ 59年1月18日（水）18時より
- ・ 千代田区平河町二一五―七
- ・ ビストロ・ラ・ポスト
- ・ 会費 五千元

- ・ 出席者 宮澤会長をはじめ40名
- ・ 奥野副会長の肝入りで、多種多量の飲みものと美味のフランス料理に、会場は和気あいあい。今年も同窓会の発展に力を合わせることを誓って散会した。

### ◆幹事会

- ・ 59年3月（水）18時より
- ・ トップバンムア会議室にて
- ・ 出席幹事 33名
- ・ 59年度総会について

日時・場所等詳細は5月中旬に

予定の次期幹事会に提案。

役員改選の年だが、会長以下役員の留任をお願いする予定。

・ 会報17号掲載原稿について  
5月10日締切りで、各期ともぜひ多くの投稿呼びかけを！

その他

①会費納入の促進を要請する。

②名簿の訂正について協力を！

③本居亮一先生（95歳）の歌集「続対岳集」の刊行（5月）

の予約購入協力をお願い（一部四千元）。

④幹事会の開催時刻を、次回より午後6時30分とする。

### ◆幹事会

- ・ 59年5月17日（木）18時30分より
- ・ トップバンムア会議室にて
- ・ 出席幹事 42名
- ・ 59年度総会開催について

- ・ 6月29日（金）18時30分より築地スエヒロにおいて。会費五千元、在学生三千円。10周年を迎え各期多数の参加を申し合わせる。
- ・ その総会案内状の発送依頼。
- ・ 58年度決算報告、59年度事業計画案の提示、承認。

その他

①会費納入に関連して、74期～94期への呼びかけについて意見が交された。

②春のゴルフ会報告（別掲）。



## 各 期 便 り

## 四三回

昭和二十一年八月三十日に初めて同期会を開いてから数えて、今回で丁度八十五回目になるので、一泊する計画を立て熱海温泉のホテル・西山で去る五月八日開催した。案内状の返信も七十八通に及んだが、目下病氣療養中の方も多く、海外旅行や所用で欠席の方も有り、十六名が集った。

今度の通知の結果、新たに青島義郎、小林勝太郎、田村 肇、榎原幾太郎の諸兄が御他界されていることが判明した。各位の冥福を祈る次第である。

当日はさつき晴れの好天に恵まれ、夕刻までには出席者十六名全員が集まり、新緑に映える爽やかな午後ひとときを出湯に浸ったり、昔語りで楽しく過ごすことができた。

宴は見原三郎幹事の開会の挨拶ではじまり、八十五回も及んだクラス会の苦心談から現在毎月三楽亭で開いている定例の廿日会（日曜、祝祭日のときは翌二十一日）

の経過報告あり、両会合共目標として先ず百回としていることを発表した。

遠来の平山桂君の音頭で全員の健康を祈って乾盃して祝宴に入った。

久しぶりの集りで各々六十数年前の童心に返って、故郷での悪童振りやら、入道館や立花館などの映画館への潜り込みしたことやら青春時代のロマンスの初披露やらの種は豊富で尽きる果てもなかった。

最後に静中校歌岳南健兄を四節まで大合唱を今井志郎君の指揮で唱たい、ひとまず一次会を終り自室に戻って改めて二次会をば夜の更けるまで昔話を語りあった。

翌朝も皆早起きで、出湯で昨夜の疲れを流してから朝食を共にして、またまたビールで乾盃し、次の再会を約して散会した。

有志の者は熱海名所の世界メシア教のMOA美術館を訪問して、目下開催中の清朝陶磁器展を主として見学し、能楽堂、黄金の茶室、オーロラサウンドの小宇宙空間

や二〇〇メートルに及ぶ地下エスカレーターに乗ったり、瑞雲郷の救世会館の満開のつつじ山をば見ることができた。

熱海駅に戻って軽い昼食を共にして、再会を約して東西に袂を分かった。

出席者は次の通り。

静岡 磯谷幸一郎 帯金鎮一

小杉 一 近藤伊佐男

滝口亀太郎 堀田利郎

見原三郎 八木友治

富士宮 統 一郎

東京 池谷三郎 今井志郎

北里良夫 豊島英夫

西沢純三 吉江誠一

大阪 平山 桂

(西沢純三)

## 四三回三羽ガラス

この一葉のスナップ・ショットは、四三回三羽ガラスの兄貴ガラス水野が、まだ存命健在の昭和四十一年頃、静岡三楽亭で催された四三回例会の席上で級友のカメラに収まっていたものである。わが世の春到来とばかり颯爽とネグラ

を飛び立った三羽ガラスが、いまや正にカアカアと濁み声をオクターブ高くあげようとしているところ。左から水野、北里、芹沢の三羽だが、この日多数出席した級友



の砌、この席上で水野が墨痕淋漓と建筆をふるった『友と交るには須く三分の俠氣を帯ぶべし』との色紙が、恰も遺書のように芹沢の手元に残されている。

周知のように、水野の令兄成夫氏は静岡出身者中の巨星で、産経新聞、フジテレビ、国策パルプのオーナー創始者であるのみならず吉田首相時代には、財界四天王のトップとして君臨、ワンマン内閣の影武者とまで謳われた実力者であった。水野も、今日まで生を得ていたならば、令兄の衣鉢の一角を継承して財界に揺ぎなき牙城を築いていたことは間違いないであろう。つらつら思えば惜しみても余りある早世であった。

北里は、老来ますます健在で、人材の網集する東電ファミリーの花形会社（東電環境エンジニアリング）の社長としていまだに八面六臂のタクトをとっている。彼の場合かけがえのない精神的な糧となったのは、後に京大に進み親しく醫政に接し薫陶を受けた西田哲学や河上経済学に裏打ちされた形而下の学問であろう。しかし、これらを形而上裡に引上げて、実戦の場の武器として活用したのは専ら彼の力量によるものであろう。

(芹沢正憲)



## 四七回

静中四七会新年会は、一月二十日の夜新宿の「松澄」で開かれた。出席率は甚だよく、二、三の諸君を除き十四名の出席であった。

年令は皆七十才前後である。然し同窓会というものは面白い。中学時代の同窓会となれば皆中学時代の気持と言葉に帰るのである。自営の仕事をしている人以外は、すでに人生は一服という境涯に入っており、お互いに健在を祝い、尚まだお元氣でおられる先生方のお噂など、なつかしく話し合った。

然し肉体はすでに品行方正たるざるを得ない年であり、後は子供や若い人に精神訓話でもする外に手はないのである。

所が明治製菓の志田君より発言あり、「同席の嶋谷博士より回春の効果抜群の漢方薬を教えてもらい、成果も亦抜群であった」という報告があった。博士からも「この薬だけは間違いない」と特に口添があった。酔眼もうろうだった全員が、一瞬飛びはねた様にキツとなつて、傍の箸袋にその名を書き留めた。然し漢方薬は片仮名ではない。まことに味の深い、おめでたい漢字が長々とした薬名であ

り、またまた、ガヤガヤと「何という字だ」「いやその字ではない」など、百家争鳴のやかましきである。

それが終つたと思つたら動議があり、幹事は苦勞して世話をしているものであり、出欠を求める葉書の表書きに〇〇行とあるのは、その宛名の行にバツをつけて様と書くべきだ、書かなかった奴の名を読みあげようと言うのである。正に読みあげようとした時、女中が新しい酒を一ぱい抱えて入ってきたので、ウヤマヤになつた。私も危く問責をまぬがれた。

楽しく三時間ばかりの時を過ごし、最後は、恒例の杉山栄ちゃんリードの岳南健児でお開きとなつた。家に帰って確かにポケットに入れた箸の回春の箸袋が無い。玄関であわてて探したが、矢張りない。家人からどうしたの？と問われたが、毅然として「いや何でもなし」と答えた。

翌一月二十一日は東京に第一回目の大雪があり、転んで入院した者二千名を越えたと報ぜられた。天候気象は仕方がないが、人生の歩みはもう無理をするなどというお示しかも知れない。箸袋をなくしてよかったと思つた。

(大村三郎)

## 四八回

## 興津街道

## 五十年前の静中同期生

半世紀前の仲間のスナップ。ほけて写つるかも、御許しの程。

地元出身四名、八木間の「木下」、中宿の「寺尾」、寺下の「山梨」、それに著者。「木下」は全く静かな物腰でお兄さんと興津駅で仲の良い登校姿が鮮やか。隣村の由比の「和田」と仲が良かったね。「寺尾」無遅刻、無欠席の毎日と。お父さんが夕方風の日、水口屋から東海ホテルの海辺で、キスや黒鯛の投げ込み釣の姿が目に残る。早春から初夏の季節であった。「山梨」はお兄さんとの登校で、私共と駅に通つた毎日。

興津の外來者としては、故「魚山」が駅裏の小学校校長宅からの野球部マネージャーの粋なジャンパー服装が脳裡に。

「飯田」と「伊藤重久」の奥様御二人の飯田嬢と田中興津町長の娘さんの女学生姿と御両家の御宅も中宿に現存の筈。

中宿海岸辺りの別荘に中学時代養生されて居つた今はなき「尾崎清」の三保を望む二階の六畳間の当時の高級畜電池式ラジオが忘れ

られない。見舞にかこつけ、六大学野球の早、慶、明の校歌を度々聞き長居した事も今も忘れられない。

寺下の西園寺公の座漁荘をはさんで、駅寄りに「加藤博」横砂よりに「原崎」の別荘での夏のまつ盛りの海水浴生活も今も膚に焼付く。ある日は寺下の岩間で泳ぎ、時に隣村の袖師行もしばしば。

灯籠流し、打上げ花火の夜、加藤親子の団扇片手の散策姿も度々うちの庭から拝見したものだ。

東名高速道路及び東海道新幹線工事前後から清見潟が埋立られ、岸壁や倉庫群の砂漠になつたのを嘆く自分。ふる里清水市興津町は遠い遠い青春が仲間と共に今も生きてと祈る。(日比野悦三)

## 五二回

## シルバー・シート

シルバー・シートというのがある。たいいてい国電や地下鉄の最前部か最後部車両の一隅に、わざわざシートの色を変えて設けてある。身体の不自由な人、お年寄りの優先席という訳だ。

はつきり何時の頃かとは言えないが、ここ数年來このシルバー・シートに何んの拘わりも照らないもなく、ごく自然に腰を下して

る自分を発見してびっくりすることがある。しかもホームに立つと無意識のうちにシルバー・シートのある車両に向つて足を運んでいるのである。

この席が設けられて、もうかれこれ二十年以上になる筈だが、この間電車の乗降に際してシルバー・シートの存在を意識したことなど殆んどなかったように思う。少くとも六十を数えるまでは、全く氣にとめることもなかった筈である。たまたま乗り合せた車両が満席で、吊革に掴まつている人もチラホラ見られる程度の混み具合のとき、ちょうど目の前のボツンと空いている席に氣がついてはっと腰を下し、ふと前面の窓に貼つてあるステッカーを見て、初めてシルバー・シートであることに氣がつく。或はまた、坐つて直ぐ新聞か雑誌を読み初め、全く氣がつかなかったこともある。

ところで、それと氣がついたときの当時の心境を振り返つて分析してみると複雑である。

間もなく還暦という年令からして、罪悪感はないまでも、何となく坐り心地はよろしくない。この席に坐っていることが相応しい年令に見えているかどうか、周囲の



思惑が気になったりする。年寄りと思われ、ことに多少の抵抗もある。もし明らかに自分より年長と思われる人がいたら、立たなくてはならない、と思いつながら車内の吊革に縋っている人たち一人一人を私に点検してみる。幸い、自分より年配者は見当たらないようだ。そこで、更めて今度は、シルパー・シートを埋めている周囲を観察してみる。まず自分の左隣りはどこからみても立派な老夫婦だが、右隣りは学生風の若者だ。読みさしの分厚い漫画本を膝の上に据えたまま眠り果けている。

前の席はとみれば、デパートの紙袋や子供ともども、たつぷり二人分の席を占領している若い母親だ。大股を据えて睡っている若者にも、堂々と二人分占有している母親にも、ごく当り前のことをしているだけという姿勢である。ふと、何かにつけ拘わりがちな自分たちの年代と心情を思い、更めて「お年寄りや身体の不自由な方に席をおゆづり下さい」と書かれた青い紙片を眺めやって、複雑な思いに駆られたのである。

六十五才を数えたいま、極めて自然な姿でシルパー・シートの人になりきっている自分を凝視め、やはり目に見えぬ疲れが溜ってきただのか、或は気力の衰えが忍びよってきたのか、まだまだ若いんだと自身に言いかけさせたこととは裏腹に、ふとシルパー・シートの年令を感じざるを得ない今日この頃である。

### 五三回

#### 旧婚旅行

96才になる九州在住の伯母から「一度会いたいから遊びに来ないか」と数年前からさそいを受けていた。この訪問を大きな目的とする他に、夫婦合せて百二十才となった思い出を兼ねて、4月上旬に行われた九州一周のフルムーンツアーに参加した。ツアー間は行程に組み込まれた計画に従って、浦上天主堂、グラバー邸、雲仙、熊本城、水前寺、桜島、日南、宮崎神宮などの点をバスという線ではない旅行を行い、数多くの楽しい思い出を経験したが、絵葉書や旅行案内書に書かれていない部分を幾つか披露したいと思う。

(広川 隆)

その1(桜)今年の冬は寒冷気象であったため、全国的に桜の開花が遅れた。例年なら3月中旬には発せられる南九州の開花宣言も約半月遅れて4月上旬によく発表されたほどであった。そのた

め、北九州では福岡・佐賀・長崎・熊本の各地で満開の桜を満喫することができた。南九州(鹿児島)の平地ではさすがに満開を過ぎ、つつじの季節に入っていたが、霧島の高原では幸にして満開の桜を観賞することができた。(考えてみれば、約八百メートルの高原では気温は平地より約5℃以上低いことになる) 帰路の行程も宮崎・大分から中国路を経て東海道路、関東と桜の満開前線に沿って本土を縦走して広範囲にわたる桜見物を堪能することができた。寒冷という自然のイタヅラが図らずも神の恵みとなった次第である。

その2(橋中佐の銅像)ツアーの第2日目、バスで長崎を出発した後、千々石湾を右手に見下しながら丘陵の中腹を雲仙に向った。この湾は、現在橋湾と呼ばれており、十数隻の石油備蓄用の大型タンカーが浮んでいることで知られている。この橋湾の名は、静岡にゆかりのある橋中佐を記念して名づけられたものである。途中、観光道路に沿って左手に明るい感じに清楚に手入れされた可なり規模の広い橋神社(元県社)があった。その時、一瞬の間であるが車窓より静岡34聯隊の正門脇に建立されていたものと同じ橋中佐(大隊長時代?)の銅像が目に入った。この銅像は、橋神社の鳥居の前に、あたかも安住の地を見出したかのよう

に陽光の中に橋湾を見下す姿で建立されていた。パスガイド嬢に聞いたところ、この銅像は戦後に建てられたものであることがわかり、まさしく静岡からこの地に移されたものと推測され、懐旧の念にうたれた。(この経緯を御存知の方が居られたら御教示下されば幸と思います)

その4(茶漬の味) 4月15日に帰宅。旅行中、各地で相応の料理を楽しんだが、最も美味であったのは帰宅後の茶漬の味であったのは、貧乏性のためであろうか。きびしい時代に結婚し、形ばかりの新婚旅行しかできず、三十余年の間我慢の日を送って過した妻が、今回の旅行を子供のよう

### 五四回

に楽しんでくれたのが最大の成果であったろうか。(徳永 悠久)

磯野修君が長年の研究の集大成を上梓する運びになった由、お便りを頂き、お祝いを申し上げますと共に、小生の最近の心境をひとつ。六十歳も過ぎる頃になると、あちこちから定年後は何々しているという便りがある。印刷屋を渡世にしている私には、その重大さがピンと来ないが、早い人は五十五歳で定年になる人もあるようで、色々苦勞や心配がおりだらうと思う一方、今更ながら歳月の流れの早いのに驚いている。

少年時代は早く大人にならないかと時の経つことの遅さに焦燥を感じたものだが、四十を過ぎる頃になると、逆に月日の経つのが少年時代の算術級数的速さに比べ幾何級数的な速さになって来るのに

何級数的な速さになって来るのに



慌てさせられる。

昔、佐々木邦というユーモア作家が書いた『地に爪跡を残すもの』という小説の中で、「足跡を残すなんて大それたことは出来ないが、せめて爪跡くらい残したい」と言っていたのが不思議とハッキリ覚えていて、ことあるごとに、「何かひとつ自分の存在理由を証明したい」と願ったものだ。

ところが、齢すでに還暦を過ぎて思うことは、漢文で習った『醉生夢死』の言葉しかない。

ある人が自嘲して「生を飲んで酔っぱらい、死んだ夢を見た」と言ったが、まさしくその通りだと思った。そこで、私は印刷屋の商売を生かし、『我かく生きたり』ということのいくつかを小説に託し、本にして残そうと思いい立ち、目下、鋭意製作中である。

皆さんも、「功成り名遂げたから、銅像を作ろうか、石碑を建てようか」などと考えずに、皆さんの回顧録・自叙伝を本に残してみませんか。造本のお手伝いをします。これはとんだ商売の宣伝になってしまつて恐縮。(庵原悌次)

## 五五回

### 随想

試験と戦争の夢にはいつまでも

悩まされるとよくいった。つまり大なり小なり人間の争いの場として強く印象づけられるせいであろう。最近、やつとこうした夢から解放されたのは、よいいとともに過去の映像として消えたのである。

わたくしが、旧制静岡中学校に入学したのは昭和十年、当時の中学校への進学率は二十％だから、現在の高校進学率の九十五％と対比するとこれまた夢のような話である。ちなみに短大を含めての大学進学率は戦前の三％から飛躍的に四十％になろうとしている。こうなると誰のための受験か分らない本人不在の過熱ぶりとなるのも無理からぬことである。

わたくしは、現在大学から附属中学校までを含む女子学園に身をおいているが、入学から卒業までのなんと物々しいことか。大学の受験でさえ親が心配げにわが子の首尾やいかにと見守っているのだから、まして中学校ともなると体育館を親の控室にと準備しなければならず、例年になく大雪にみまわれた本年はさらに拍車を加えたというわけである。

振り返って、われわれの時代はどうであつたらうか。中学校でも親の姿など見かけなかったと記憶

しているし、発表も各自が確め、ひそかに喜び悲しんだと思う。それに比べ、現代っ子気質が悲喜交々というよりも陽気なものと見受けられるのはわたくしだけだろうか。

「合格してもまだ受けるところがあるの」「うらやましい！ あんたの合格もらえないかしら」といった会話。入学式ともなれば親子ともども百花繚乱の面持ちで受験休戦の安堵を隠しきれないといった満足感にひたっている。さきの不安があるのやら、ないのやらどこ吹く風といったら言いすぎだろうか。

戦争といえば、終戦の詔勅を拝したのは小笠原の父島であつた。兄を含めて戦没者の諸兄には申し訳ないことではあるが生きることの実感、これとこれからの不安との交錯はいまだにんとして忘れがたいことである。自分だけならいざ知らず、日本丸の沈没で五里霧中、これこそ夢の題材でなくてなんであらうか。

さて、私事につけ加えて恐縮であるが、故兄正一は昭和十年の五十回の卒業で、十九年十一月二十一日南支で戦死、在学中は諸先生はもとより、同僚、後輩の方々に大変迷惑をおかけしたと覚えて

いる。父は兄のことでよく学校に足を運び、親子ともにお説教を受けたことが余程身にしみていたらしい。兄の卒業と同時に入学したわたくしには、父はむしろ被害者の方がまだましだと思ったのもむべなるかなと思う、その豪快な兄と似ても似つかぬ軟弱さで江戸の仇を長崎でということもなく、また父の出番もなかった。父、兄とも他界して本音をうかがうよしもない。二年生のとき第三十四連隊の軍旗祭で学校のテントを拝借に及んだ兄が「弟がお世話になって

います」との下りで、兄弟であることを知った先生から、「お前の実兄か」と問われ、なんとも恐縮したことは今でも脳裡から去らない。入学式になると兄弟同じ学校に籍をおくことになった父の悩みが察せられる。

さて、昨今のように暴力教室が問題とされるなかで、原因は単純でないにしても、われわれの時代は、茶目気か、独りよがりの親分きどりのユーモラスがあつた。上級生が沢庵石となつていたから、現代の中学校三年生の勝手な振舞いには分別の緒についた上級生がいれば、それが親や教師の頭痛の鎮静剤にもなるのではないかと思

う。ここに三年きざみのあわたたしい中等教育のきざみに対して学制改革の声が子どもたちのために叫ばれるのである。

(高橋恒三)

## 六一回

### 随想 — 近況報告 —

四月十四日、六十一期生の同窓会が静岡市の県警保護所「英密荘」で行われ出席した。三浦先生以下約七十名出席と極めて盛会であつた。

顧みると我々は昭和十六年四月から二十年三月と、まさに太平洋戦争の只中で学窓を過ぎたわけである。軍事教練、勤労動員、空襲そして海軍兵学校へと。爾来四十年を経過したわけである。入学者は約二五〇名、卒業者は二六名という。殆んどがサラリーマンとなり、その勤勉なサラリーマンは日本の今日を築き、そして今、五十五才の定年の時期を迎えている。

さて、私もサラリーマンとして典型的な道を歩んだ。その最近の一駒を綴る。

先般、本籍地の島田市から「戸籍の附票」をとった。住所の異動のたびに本籍地に報告され記録されており、この「附票」には異動状況が逐一記載されている。それによると、私は昭和二十五年四月



青雲の志を抱いて故郷島田を立つてから今迄に十七回転居したことになっている。そのうち大半は勤務先の新日鉄での転勤に伴うもので、転勤は東京を中心として、室蘭、釜石、名古屋、姫路と十回を数える。お蔭で、長男は幼稚園二回、小学校三回、中学校三回転校させられた。そして昭和五十六年二月、日鉄セメントへ出向し、その本社のある室蘭市に単身赴任した。北海道は前後三回延べ八年半の勤務となったが、昨年十一月新日鉄の定年を控えて、その北海道について、やや慨嘆的な感想を書いた。即ち、

「次に最近北海道経済事情について。当地室蘭周辺は、道内屈指の工業地帯ですが、新日鉄、日鋼そして地場の造船、セメント等、不況に喘ぎ、日軽金、志村化工は遂に撤退と意気揚らず、紙の王子、大昭和がひとり気を吐くのみ。石炭夕張が解体し、幌内も氣息奄々。苫小牧東部工業団地は、誘致工場がRカーのいすずと石油備蓄と若干で巨大空地となっている。農業は旭川地区の水稲が冷害、霜害、そして積雪による倒伏と潰滅状態で、十勝の豆、ビート、牧草等畑作も冷害で大打撃。全国に対し土地二十二%、人口五%、工業生産

高二・五%のバターンは更に悪化の見込である。その中で漁業は釧路を中心に活況を呈し、サケの漁獲高は史上第二位と云う。高価で美味なベニサケの飼育放流試験が行はれ、その潮上が期待されている。又、日高の競争馬の取引高は過去最高となった。あとは観光が。札幌そして観光地にはホテルが聳立している。私も延八年半の生活で広い道内を一巡したが、印象に残った所は礼文島、知床半島、釧路湿原、十勝平野、ニセコそして洞爺湖か。第二の故郷となった北海道の将来に思いを廻らしている今日此頃である」と。

その舌の根の乾かぬ内に、十二月、新日鉄セメントも退職し、現在の三菱金属工業㈱に勤務することになった。セメントから再び鉄への商売替である。主として自動車用のボルト、ナット、ネジその他部品の素材となる棒鋼の製造である。現在、乗用車、特にトラックの生産が活況を呈している為、当社の操業状況も好調である。しかし何よりも都合の良いことは、本社が新宿西口の甲州街道脇にあるので上北沢の自宅から通勤に至便なことである。五年振りの東京暮らしで現在東京中をホツキ歩いている所である。(安原徹治)

## 六二・六三回

### 一泊同期会

#### 修善寺に実る

伊豆修善寺温泉に、のだや去留庵という名湯がある。代々修禪寺との関係も深い格式ある老舗で、当主は野田幹郎君(63回)の令弟である。家業を弟にゆずって彼は富士銀行を勤め上げた後、東京に事務所を持って活躍している。

昨年、竹橋会館でやった際、いっぺん野田君の所でやろう、という事になったが、勿論みんな大賛成だ。

かくて59年2月11日の夜、念願の一泊同期会が修善寺の去留庵に

おいて開かれる事になった。

今年の冬は寒きひとしお厳しかったが、この日はやわらかな日射しが如何にも伊豆らしい雰囲気。我々をつつんでくれた。

定刻六時を前に三々五々到着。受付で大石一、三枝、鈴木惣君等が待ち受ける。連休の為マイカー組が渋滞に悩んだ様だ。出席出来ないけれどと言って、穴水君が顔を見せてくれた。

去留庵自慢の総檜造りの大浴場檜香殿で、身も心も素裸になつての語り合いから幕は切つて落された。修学旅行も卒業アルバムも、何んにもない戦中戦後の静中時代を過ぎただけに、思い出だけが友情の絆であり、それがまたひとしおなつかしい。

平尾君の挨拶につづき、柴田克朗君の司会で例によつて出席者全員が一人づつスピーチ。「こういう会に出るのは優等生だけかと思つていたら、そうでもないのが安心した(笑)」などと、人生経験をつんだ同期生がその心を往年の中学生にゆり戻して、懇親の和を深めていく。

スピーチはばっちりテープにおさめたので、これをもとに顔写真入りで同期会誌第二号を発行する予定である。



演説、カラオケ、と次第に騒然たる雰囲気になったが、時間の制約もあるので、校歌と応援歌を大合唱、物故者への黙禱、友田応援団長による三々七拍子、最後に万才三唱で大広間は閉会となる。

引き続いて飲みものとおつまみを一ぱい揃えた二次会室へ集合。飲む程に酔う程に、論客あり美声ありムード派あり酒豪あり、夜の更けるのを知らず。奈良橋、杉山の両君が、茶わんだいこで歌っている。午前三時であった。

実は翌二月十二日に大仁ゴルフクラブで、同期会コンペを企画したが異常な積雪のためゴルフ場はクローズ、コンペは取り止めとなつたので夜を徹して呑む羽目になったわけである。

翌朝、朝風呂を浴びた元気な顔が大広間に顔を揃えた。昨夜の余情醒めやらす、賑やかな朝食をとり、朝食中杉山邦雄君の母堂の挨拶があったり、庭園の散策などを楽しみつつ散会となった。

帰路にも楽しき武勇伝が聞こえてきた。

(出席者) 阿部慶三 荒浪直彦 家本 豊 石上昭夫 伊東 守 大石一輔 大塩幸男 金子 迪 川手生己也 北堀勝雄 小島義雄 (旧姓田中) 近藤敏夫 三枝弘



之 柴田有年 柴田克朗 清水裕  
二 杉山邦雄 鈴木市三 鈴木新  
之輔 鈴木惣吉 鈴木雄次 高橋  
銀一 谷 繁次 塚本修司 友田  
武 中野喜久男 中野 弘 中  
山正明 奈良橋昭雄 野田幹郎  
平尾謙司 深見一正 森岡康明  
山田浩介 横山英雄 吉永勝也  
渡辺幹雄 以上三十七名

### (写真の説明)

旅顔のおねえさんが入りこんできたのでみんな慌てて「来るな来るな」と騒いでいる。

### 六四回

中学卒業以来三五年ぶりに同期会に出席した方は入学の時の級長だった蛭川博之君、風雪に耐えて髪は大分白くなったが、瞬時に昔の美少年の面影がよみがえった。

五九年新年会を名波幹事の尽力で場所を変えて、新橋、新橋亭で一月一三日開催した。同時に昨年参議院補選に見事当選した藤田栄君の祝賀会も兼ねた。

出席された友は、総勢三十名。静商の大原氏も特別参加され、静岡より秋山会長、近藤昭蔵幹事の出席をみた。

増田誠男(東京書籍支社長)の乾杯で始まり、それぞれ藤田君へ

の激励の言葉と中学時代の思い出を語り、来るべき再選に協力を誓い合った。



望月址君の、住友校舎の頃の藤田、斉木、八木君とのかかわり合いの話が特に印象深かった。

望月康逸君の音頭で校歌斉唱、続いて、応援歌と寒気と不景気風を吹き飛ばし、本年は良き年である様に念願し、初春の街を後に別れた。

齋、四月二十三日、岩本プレス工業三十周年記念兼本社社屋新築披露パーティが、緑町で盛大に催されました。岩本君の努力に敬意を表し、今後益々の発展を祈ります。

(野沢正憲)

### 六七回

故桜井昌一郎君を偲んで

会報編集委員の方から「総会の蔭の功労者である桜井君のことを書いてくれないか」との依頼を受けてから久しい。その総会も、第十回目が目前に迫ってしまった。思いつくまを綴らせて戴く。

昭和五十二年度の総会は、日比谷三井ビル大会議室で催され四百余名の参加者で会場は満杯となった。あまりの盛況に予想を読み違えた会場係を慌てさせたが、スベイスは立錫の余地もなく、定刻より遅れて来た参加希望者の中にはその混雑ぶりに、入場するのをためらい諦めて帰途についた人々もあったと聞く。これほどの盛会になった要因の一つは、月見里幹事長の言によれば、郷土食(色)豊かな盛付けがあったからで、以後七回連続継承されて、お馴染みになっている「郷土土産品の即売」と「黒はんぺん」の魅力が係わっていたのは確かであろう。

この企画そのものは、幹事会での奥野副会長の発案で決まり、この年が初めての試みであった。この名案を実現させるため、どうしても静岡在住の協力者が必要

で、その白羽の矢が、六十七期の桜井昌一郎に立ったのである。

奥野副会長は、再三静岡に赴きその都度桜井に会い打合わせを重ねた。安倍川もちの石部屋や、わざわざ潰の田尻屋へは、共々直接足を運び、購入の主旨を説明し、運搬上の無理など何んとか説得して了解させたのだった。

「にえきりおでん」「フライ」については、桜井の職業柄(当時静岡県水産(常務))彼に一切を任せさせたのである。

一担、他人に依頼を受け、その人の熱意を感じれば、傍観することなどとても出来ない質の桜井はすぐ持前の行動力で動き廻ったのだった。

静岡独特の「にえきり」の味を

東京の諸兄に供しようと、タレの美味しい店をピックアップして、協賛者探しに夜毎「おでん屋」通いをしたのである。同期有数の左党であった桜井にしてみれば、誠に結構な口実で、同伴する友も多く、楽しさ半分苦勞半分の道行だったか。何夜か尋ね歩いた末に人宿町の「おでん」の老舗(?)のおかみとお手伝さんを口説き落とし、タレ共々東京への出張を約束させた。が、最終的には総会間際になって、予定参加者の数の多いのに驚いたおかみは、手をあげてしまい、タレの提供のみでご勘弁を言うことになってしまったのである。

開催日が迫っていたし、困惑した桜井は、当時、会場設営業・イ



卒業30周年記念パーティーの挨拶をした故桜井昌一郎君



ベント会社を創設した同期の織田三喜彦に相談し、早急におでん鍋や模擬店用屋台を新調させた。織田も快諾、全面協力を惜しまなかった。

四〇〇名がおでんとフライを三本つつ食べても二、四〇〇本である。桜井は、仕込み要員に、女房は勿論、友人の女房連も動員し、織田は織田で市会議員選挙の母体となつてゐる地元の女性を集め、開催日前日に、じゃがいもの茹であげや、フライ種の申さし作業を開始した。作業場は織田家提供。

当の本人、桜井と織田は、宵の中には準備完了するものと予想して、すし屋で一杯やってから、すし折持参で陣中見舞に向つたのである。作業を眺めながら、又盃を重ねるつもりだったらしいが、素人のやることの悲しさで、作業は捗らず、何時終了するか覚束ない有様で、ご当人二人も手伝う破目になり、作業は夜半すぎまで続いたのだった。

こうして、材料を満載した車は先述の老舗のおでんタレと共に翌早朝静岡を発つたのである。

開催日当日は、三井ビルの社員食堂調理室の設備を借りての、煮込み直しや、フライの仕上げ、そして、会場への運搬陳列等、大へ

んな作業があったが、これにも彼が声をかけ呼応してくれた友人や織田の配下が静岡より馳せ参じてくれたのだった。

今は亡き大村益造が豪力を發揮してくれたり、永井滋惟がデザート食品売場で鍛えた呼び込み声で土産品売場の雰囲気盛りあげてくれたことが想い出される。

こうして、学校創立百周年を控えての総会は、新しい企画とともに、大成功裡に終了することが出来たのである。

その翌年より今回までの総会はお馴染みのスエヒロに会場を移すことになり、おでん・フライの調理は、スエヒロの板前さんに任せることになった。静岡での申さし作業はなくなったが、材料の手配・運搬等は、今回まで、桜井が段取りをつけてくれた通りに継承されている。

初回のスエヒロにてのパーティーの折、桜井は、午後三時頃にはすでに上京し、会場設営を手伝う傍らスエヒロの調理場にもむきおでんの煮具合など観察し、開会前に職員がテーブルに並べ始めると、早速試食のつまみ喰いに廻つた。「まあまあだな」とニココリ

した嬉しそうな顔を思い出す。自分の手配した材料の吟味と、味付け方を確かめたのである。

前日、折角静岡より運んだ「粉のり」と「粉けずり節」がテーブルに出ていないのを発見したのも彼であり、調理場へ足を運び、ソースもフライにかけるのではなくフライをソースに漬けて食べる静岡流マナーを説明し、ボールにソースをなみな注がせたのも彼であった。冗談半分に「アルミの弁当箱はないか？」とスエヒロの板前の眼を白黒させたりもした。

スエヒロ側としてみれば、「粉のり」も「粉けずり節」も、その用途が全くわからず冷蔵庫に保管してあったのである。ましてや、ソースをボールに注いでテーブルに並べるなど思いも及ばなかったであろう。そのうえ、アルミの弁当箱云々では驚くわけである。

桜井としてみれば、静岡の屋台の雰囲気を出るだけ出して、諸兄に満喫してもらえればと思ったわけで、これも、受けた仕事に対する彼の真向きの表われであった。

総会の会場が、スエヒロに定着してからは、原材料を前々日に焼津より発送し、前日の朝スエヒロに到着させ、保管・調理すること

になったのであるが、当日には、必ず焼津の事務所から電話が入り荷物の到着の確認を怠らなかつた彼である。具の半生製品の扱いには重々の注意を払っており、脳動脈瘤破裂で入院加療の生活に入ってから、総会のことを気にかけて、問合わせが続いたのである。

こと斯様に、あの粗野な、がらがら声の語り口とは裏腹に、非常に使命感の強い男であった。

去年の九月十七日、桜井は急逝した。当日昼過ぎ桜井の訃報に接した奥野副会長は、母上が危篤であつたが、それを伏せて、即刻車をとばし静岡の桜井の自宅へ弔問に向い、時刻には桜井の枕許に座して冥福を祈つて下さつたのである。奥野副会長と桜井の接触は短期間で、回数も少ないが、やはり肝胆相照らすと云うか、一期一会の機微とでもいうのか、何か窺い知れない心の通じ合いがあつたのではなからうか。同席していた同期の友人達も肅然とした。奥野副会長の母上はその翌々日天寿を全うなさつたのである。

桜井についての逸話は限りない。最後に、桜井の葬儀の折、同期の者が供えた弔電と弔辞を披露

させて戴く。

NHKの「邦楽百選」の録画撮りで金沢へ出張中の山川静夫からは、左記の長文の弔電が寄せられた。

昌ちゃん、君と唄った最後の歌は、甲子園大会歌（ああ栄冠は君に輝く）であつた。

雲は湧き、光溢れて天高く純白の球、今日ぞ飛ぶ。臉を閉じると三塁手桜井の投げた矢のような球が鮮かな白い一本の線となつて浮かんでくる。それは掛け替えのない我々の青春の色と形だ。

君の五十年は余りにも短かつたがその密度は、余りにも濃い。友を愛し、野球を愛し、何時も明るく力一杯生きた昌ちゃんの冥福をただ祈るのみ。

小学校・中学・高校と同じ学校で学び、大学在学中は同じ下宿、一時は職場をも共にした金子堅司は、友人を代表しての弔辞をのべた。

——前を略す——

昌坊、今一度ここへ出る。そして共に笑い泣こうではないか。せんないことを申し上げた。昌坊、見えるか昌坊。こんなに多勢の方々が君の冥福を祈つてお集まり下さつた。君の人柄によることは言うまでもない。自然と周りに



人が集まる男なんてそうザラに居るものではない。そんな君が、何故、何故、何故だ。悔んで余りある。

酒盃を磨いておけ。牌を揃えておけ。なに桜井、早いか遅いかだけのこと、人生一朝の夢だ。君は君の人生を精一杯生きたのだ。先に逝った同期生と一緒に冥府の世界の六十七期同窓会の準備をしていてくれよ。

あとのことは皆が手伝うどうか心安らかにお願い下さい。

今日までの親しいご交誼に對し心から御礼申し上げてお別れの言葉とします。

昭和五十八年九月二十日

両君の弔電、弔辞にもある通り彼は、密度の濃い生涯を、精一杯に生き、力を傾け尽くして逝ったのである。

この処世の態度は、六十七期のリーダーとしても、静岡野球部OB会会長としても然りであり、そのほんの一端だったが、関東同窓会への協力という形でも如実に示されていたのではあるまいか。

今年もスエヒロの大宴会場は、先輩、後輩で溢れ、熱気につつまれることであろう。土産品売場には、毎年、彼と一緒に応援に駆け

つけてくれた、織田や増田や光木の姿もみえるはずだ。そして、その傍には、桜井が、にこやかに立って、見守ってくれているような気がしてならないのである。

## 六八回

(梶原由三)

### 単身赴任

今から約2年前の昭和57年2月私は初めて転勤を経験した。サラリーマンにとってつきものの転勤は、私の会社が一社一工場ということから、私にとって、転勤がなかったからである。

ところが、親会社が青森県六ヶ所村(鉾の形をした下北半島の首根っこにあたる所)で石油国家備蓄基地を建設することになり、同一企業グループからも人を出すことになり、私もその中の一人となったためである。

生れも育ちも暖国静岡、雪深いみちのく生活に不安をいだかなかつたらウソになろう。

でも行って驚きはここにも岳南健児が勤務していたことである。

60期河村敏尚氏、77期川崎勝彦氏の二人であった。爾来2年有余良きにつけ悪しきにつけミニ同窓会を開き、校歌を歌ったことは言うまでもない。

それはさておき、家庭の事情から私は単身赴任となった。住宅は申し分なかったが、何んともやり切れなかったのは食事であった。東北地方は塩辛いものが大好きとは聞いてはいたが、イヤハヤものすごく塩辛い。

味噌汁、漬物、煮物等々とても口に合わなかった(一生懸命料理を作ってくれた人には申し訳ないが)。素材は魚、野菜いずれも新鮮でおいしいのに、なんでももう少し味付けを考えてくれたらなあというラメシク思った。

長い間、家人が作る料理が天下一品と想っていた私にとっては、単身赴任での泣き所は「食物」であった。

でも馬刺、はたて、ウニ、アワビ、キンキン、タラ、カレイ、長芋、馬鈴薯、リンゴ、米等々本当においしかった。

又、青森は四季の区別のはっきりしている所でもあった。緑に草萌える春、ちよびり短かい夏。

紅葉が素晴らしい秋、そして長い白銀の世界。真冬は10日も15日も真降るばかりか、一寸先も見えなくなる地吹雪がある。とても静岡育ちでは想像ができない。それだけに春が待ち遠しいし、

短かい夏には「ねぶた祭」を筆頭とする祭りが目白押しで、冬のウッポンを晴らす。

加えて青森は人に知られない名所旧跡がある。二年間にこうした観光業者に毒されていない素晴らしい場所を廻ることが出来たのは、これも単身赴任のおかげかも知れない。

元来、家族は神が永遠に引離すのを除けば一緒に住むべきであるが、諸事情のため家族帯同が許されなければ、この期間を互いの生活をもう一度再点検し、リフレッシュする時間としても良いではないかと思っている。

ところで、一人残された家人にとつて慰めは大であった。フォックスステリア種の喜怒哀楽を目に表わす表情豊かな犬であった。

私が転勤して、しばらくの間、定時になると玄關先に坐って帰ってくると思っている私を待っていたさうである。そして帰って来ないといわると、スゴスゴと自分の定位置に戻って、さびしそうな顔をしていたさうである。

でも、その犬も私が帰ってくるのを待っていたかのように天国へ行った。愛犬の気持を思うとイジラしくなる。いずれにしても私にとって「み

ちのく一人旅」は終わった。

単身赴任は、公私共、私にとつていい経験であった。

これから以前のように(何時また転勤があるかわからないが)家人と「二人旅」が続くだろう。

天国から愛犬が、どちらかを迎えに来るまでの間。(雨宮明生)

## 七〇回

### 恩師のこと

三木 卓

文筆で生活を立てるようになってから、もう足かけ一七年たつてしまった。そういう生活をしていると、静岡へ行く機会も多い。教えをうけたかつての恩師にめぐりあえることもあつて楽しい。

もう七、八年も前のことになるが、静岡市の安東小学校(わたしの出身校)で講演をし、終ってホッとしていると、「富田、げんきですネ」という九州なまりの懐しい声が聞えてきてびくりした。国語の本告亮一先生である。わたしの習った昭和二十六年ごろにも、もう若いというお年ではなかったように記憶するが、瘦軀で温和だった先生がそのまま年輪を加えられた元気なお姿にお目にかかれて、一瞬時の逆転するのをおぼえた。



蒲原有明の甥御でいられた先生は静岡名物であり、わたしには漢文を教えて下さった。わたしが文芸部の機関誌「塔」に書いた文章を読んで激励して下さいたことをありがたくおぼえている。やはり文学少年には目をかけて下さったのであった。

先生は退職なさってから、悠々自適の生活を送り、志のある人々をあつめて、万葉講義などつづけていられた。これはわたしの伯母が参加していたので知ったことである。もはや先生は仙人の域である。昭和三十六年に第一歌集「対岳集」を刊行、目下「統対岳集」の編集が進行中と聞く。最近になって愛知のお子さんのところへ身をよせられたとのことであるが、いったいおいくつになられたことだろう。お元気でいつまでも、と思う。

静岡時代、わたしがつともおそれたのは数学の先生方だった。解折Iを教えていただいた北川巻平先生の授業は、わたしにとって戦慄の一語に尽きるものだった。先生は決して怒鳴られたりしないが、わたしたちが、虎の巻の運算を黒板にそのまま丸写しで書いていたりすると、ニコニコして、「これは途中がちがっているのに答が合っている。つまり二度まちがっ

ているんだな。それともキミ、写しちがいか」とヤンワリいためつけるのであった。

その記憶があるので、おそれおのきながらお目にかかったら、柔和でやさしいお人柄で、意外の感にうたれた。こつちがこどもで苦手学科だったから先生のありのままの姿を見ることができなかったのだな、とつくづく思った。そしてきつと、先生方というものは生徒の側の勝手な都合で、ずいぶん誤解されたままになっているのだらうな、と考えたりした。

わたしは、静岡時代は、社会科学研究所と文芸部に所属していたが、三年間を通じて一番お世話になり、また人格的な影響を受けたのは、社研の顧問であり生徒部長であり一般社会の担任でもあった渡辺藤男先生ではないかと思う。先生は韭山高校長を退任され、今は三島の私立高校の校長をなさっていられ、お元気でいる。

ここ数年のあいだに幾度かお目にかかり、いっしょにお酒をいただく機会があったが、やはり、学生時代には理解し得なかった人格の厚味を知ることが出来、感動した。アジアへの、学生時代からの夢はますます盛んで、せんだつては、奥さまを伴ってシルクロード

へ行かれた。ハミの瓜は美味だったとのことで、NHK TVの「シルクロード」で、その瓜の実っているさまを見ているだけに羨ましかった。その夜、いつもながらの大きなお声で、静岡赴任時代のことを、実に懐しうに語られ、わたしはたのしくて時のたつのを忘れたのである。(本名富田三樹)

## 七三回

### 第七三期関東同窓会

#### 福岡支部大会

当然なことだが友とはいいいものである。それが遠く離れていればなをのこと懐かしいものである。

表題の関東同窓会福岡支部なる全く意味のわからぬ組織が生れたのは、関東同窓会員の仲川、葉山の両君が福岡へ転動してからのことである。彼等は関東同窓会の中に勝手に福岡支部なる大組織をつくり、会長、副会長を持ち回り制にし、というのも、他に会員は誰れもないので、かの有名な中洲の夜を舞台に会合と称しては集会を重ねていたのである。曲がりなりにも東京での同期会ということになる、人集めに始まり、日時、場所の選定など幹事は大変なのだが、福岡支部の場合、酒に始まる二人の趣味が、というより好

みが一致しているのか、電話で十秒も話せばすべては決りということになるようである。そしてそのような彼等から「お前は代表幹事のだから、福岡支部の盛会の様子を視察に来る義務がある」と威され、意を決して、一人では心細いので、親友というよりは悪友に近い中川明久、望月公美をさそって福岡入りをしたのだが、結論からいうと、この人選に問題があったのである。

久方ぶりに会った彼等は、当初心配した地方転勤の淋しさなんてこれっぽちも感じさせないどころか、よほど福岡での仕事が好調なのか、それとも何か他の事が肌にあっているのか、心身共に元気いっぱいなのは、さすがの我々三人も驚かされた。しかし彼等の顔を見、彼等から「ヨーお前等本当に来たんだなあ」と云はれた時は、彼等も全く我々と同じ気持ちだったと思うが、胸の奥がジーンと熱くなる程嬉しかった。聞くところによると、彼等は一ヶ月も前から恋人(変人ではない)を待つことと準備をすすめ、指折り数えて待っていてくれたという。

ともあれ食事ということで、名物のぶくを肴に最高の歓迎をしてくれる。食い物も旨ければ、つき

ぬ話も旨い。ああ来てよかったという実感がわいてくる。

話には聞いていたが、中洲の夜は不夜城であった。どの店も彼等の出勤状況が良いのか、それとも自分の家と勘違いしているのか、俗にいう「顔」である。しかも驚かされたのは、最初にいった店で席につくやいなや、見るからに女傑とおぼしきママが勝負、勝負! といって近づき、文字通りイカサマというか口八丁、手八丁で、アッというまに三人共大枚をむしりとられる始末、そのあまりの見事さにアッけにとられ悔しさもおきてこない。福岡支部の二人は女傑とグルなのか、今迄自分達が連敗したうつぶんが晴れたのか、実に嬉しうである。帰りに女傑から博多土産をと、例のからし明太子をもらい、「さすがに良く気が付く店だ」なんて気分よく店を出るが、外の冷気にあたると、なんてことない、さっきの掛金で明太子を買ってきたことに気付く、やけに高い明太子をぶらさげ中洲の夜をほつき歩く。

次の店はやはり彼等の好みらしく、若い女性でいっぱいのお店である。普通の友であれば、東京から良い男が三人来るから宜しくと前宣伝すべきなのを、悪い奴が来る



から気をつけるよ、とても云い含めておいたらしく、気のせいかわ女達の視線がつめた。人間とはわからぬ者で、真面目で通っていたXは、我々を東京から男芸者として呼んだつもりでいるらしく、歌を歌はせムードを盛り上げさせたいので、照明をおとさせ、自分の娘程の女性を前にして、娘をいたわるような優しさのなかに、何か中年のそれを感じさせる目付でジット見詰めあう図なんて、バカバカしくてとても歌など歌えたものではない。又、彼等は夜と昼をはっきり使いわけているのか、それともネクタイ姿ではさすがに気が引けるのか、夜の服装は全くラフなスタイルなので、我々の方が途惑わされてしまう。少し酔ったせい、何で成田空港のボーターが我々と一緒に酒を飲んでいるのかと驚いてよく見ると、Yのサファリルックだった。少しする。

ゴルフも名門芥屋ゴルフコースで楽しみ、文字通り中味の濃い同期会であった。

しかしなんといっても今回のハイライトというか圧巻は、中洲の屋台ではなかったろうか。屋台といってもチャチなものでなく、十二、三名は入れる大型のものが川に沿ってズラーと並んでいるのだ。が、ホテルに帰る前の最後の仕上げにはもってこいの場所である。どの食い物も旨い上に、庶民的雰囲気も素晴らしい。そこで明方近くに客全員で静高の校歌を歌ったのである。客は我々の他女性が六名、男性が一名だったが、我々にハッパをかけられ、屋台の夫婦も加わって、始めは何で俺達九州人が静高の校歌など歌わなければいけないのだというような顔をしていた連中も、何度もやっているうちに半分ヤケ気味ながら「清きは我等の心ナリ」なんて大声を張りあげ、あげくのはてには、いよいよ破れかぶれで「フレ、フレ、静高！」と叫ぶ始末。今回の成果が全てここに凝縮された充実感があった。

翌朝、案じたとおり、私以外の二人はもう一日残るという。理由は、大宰府天満宮参りだともっともらしい事を云っているが、彼等に参加される菅原道真の方がありがた迷惑のはずだ。彼等の目的は分りきっている。彼等の中にあつて随一良心と見識のある私ナシで「悪夢のような夜」を期待しているにちがいないのだ。

それにしても、我々気狂グループに付き合ってた下だった福岡の人間味溢れる皆さんありがとう。仲川、葉山本当に楽しかった。福岡支部の為に、当分の間、東京へ帰ろうなんてやばな事考えないでほしい。(中西英一)

## 七七回

77期は今年で42歳を迎える。18歳で郷里を離れて以来24年を過ぎた勘定だ。

当然静岡より東京に居住する期間の方が長くなっているわけで、それだけ東京の生活をエンジョイしようとして努力している。

77期にちなみ、七夕会と名付け七月七日近辺の土曜日に同期会を開催している。

今年はずいぶりに七月七日が土曜日ということで、是非この日に開催しよう準備中。

関東近辺に在住する仲間がなんと約130人もいる。そのうち40人ぐらいが毎年同期会にはせ参じるわけだが、和気藹々のうち楽しく過ごす会となっている。

ゴルフも盛んで、年2回のコンペを楽しんでいる。春のコンペは既に川崎国際でやったが、100以上叩く人もなく、レベルの高いコンペと自負するところ。

静岡に比べたら「生活環境」等決していい所とはいえない東京で頑張る男盛り(女性も10名ばかりいました)の42歳の集団。ますます活躍できる時だと話し合っています。(村松タカ)

## 九五回

早いもので、高校卒業して、もう五年の月日がたちました。

男の子たちは、うーん、まだまだ「少年」が多いようです。しかし、大物は、これですべてはいけません。これから期待!

女の子たちは、世間で言うところの「お肌の曲り角」にさしかかろうというのに、とっても若い!(気が)。

でも静高の女の子は、高校卒業してからぐっとかわいくなる、というのが実感、と言おうか、観というところ、ハイ。

ところで、かの「カワモトパン」の御曹子、川元久士君が、家業を継いで、「うまいパン」を究めるため、二年間のドイツ留学に発ちました。

「いやあ、スイスの山々はすぐ近くだし、ビールはうまいからね」と、やや不安な言葉を残していった彼ですが、是非がんばってもらいたいものです。みんな応援しましょう、大地震に備えて……。

以上、ある九五期生の然々なる埋め草でした。(K・K)

建築設計・監理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役 成岡英彦(67回)

一級建築事務所登録7425号

東京都新宿区西新宿7-14-9 規格ビル  
TEL 03-363-8604(代表)

総合広告代理店

株式会社 ア ド プ ロ

代表取締役 朝比奈 正 三(67回)

東京都千代田区内神田3-4-5 岡崎ビル3階

TEL 03-254-2171(代表)



## 謎解きの随想

40 回野崎操一氏著書「心の軌跡」から

編集委員 月見里 得知郎

## 八俣の大蛇は踏躰

に画いて見ると次の図のように表現される。

やまたのおろちは何だろうか。

『古事記』に記されている八俣の大蛇の粗筋は、次の通りである。

須佐之男命が出雲国の肥の河上

に来ると、簀が流れて来たので、

上流に人が住んでいると思い、尋

ねて行くと、老人夫婦が娘を中に

して泣いていた。命が泣く訳を聞

くと、八人の娘が居りましたが、

高志の八俣の大蛇が毎年来て食

てしまします。今それが来る時

すので泣いているのです。またそ

の形は、目が赤はうすきようで、

身体は一つですが、頭が八つ尾が

八つあって、胴体には舌が生え、

槍と杉が生え、長さは八つの谷八

つの峰に跨がり、腹は爛れて血が

流れていますと答えた。命は老人

夫婦に、強い酒を造り垣根を廻ら

し垣には八つの門を作り門毎に八

つの棧敷を設け棧敷毎に酒樽を置

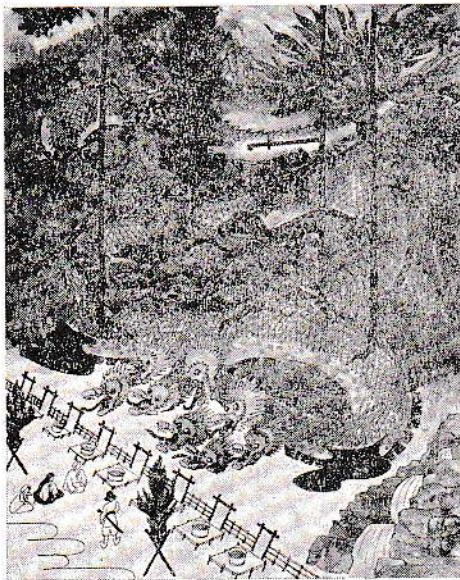
き樽毎に強い酒を盛って待つてい

るように命じた。以上の文章を絵

古来この怪物物語に対して、多くの説が唱えられている。室町時代の公卿で古典学者一条兼良の人間の悪心説を始めとして、柳田国男・肥後和男・西郷信綱・大森志郎の水神説。川添登の大地母神説。神祕的な注連縄説。寺田寅彦の洪水説。それに類する鉄山説、雪崩の跡説、斐伊川氾濫説。吉村貞司の竜蛇説。実吉達郎の水生爬虫類説。柳田国男のオロチオン族説。桜井光堂の鉄掘り部族説。鯨鉄業者専業集団説。その外八人の山賊首領説、出雲の鉄山族説、北陸地方部族説、たたら説など。どの説にも一理あるが、これらの内で、砂鉄製鉄のたたらではないかと思う。その理由を述べよう。

『古事記』と『日本書紀』を比較し特記すべき項目を上げると、

| 項目     | 古事記                                                                                                                                                            | 日本書紀                                                                                                                        |
|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 一 人物   | 須佐之男命<br>足名椎・手名椎<br>櫛名田比売<br>出雲国肥の河上鳥髪<br>身一つに<br>高志の<br>年毎に<br>八頭八尾<br>八稚女<br>八塩折の酒<br>八谷峽八尾に度り<br>身に蘿と檜羅と生ひ<br>目は赤加賀智<br>腹は血爛れ<br>簀流れ下りき<br>御刀の刃毀け<br>草那芸の大刀 | 素戔鳴尊<br>脚摩乳・手摩乳<br>奇稲田姫<br>出雲国鍛之川上<br>年毎に<br>頭尾各八岐<br>八箇の少女<br>八箇の酒<br>八丘八谷の間に蔓延れり<br>松栢背上に生ひ<br>眼は赤酸醬<br>き剣の刃少し欠けぬ<br>草薙の剣 |
| 二 場所   | 出雲国肥の河上鳥髪                                                                                                                                                      | 出雲国鍛之川上                                                                                                                     |
| 三 身体   | 身一つに                                                                                                                                                           |                                                                                                                             |
| 四 経路   | 高志の                                                                                                                                                            |                                                                                                                             |
| 五 時期   | 年毎に                                                                                                                                                            | 年毎に                                                                                                                         |
| 六 頭尾の数 | 八頭八尾                                                                                                                                                           | 頭尾各八岐                                                                                                                       |
| 七 女性   | 八稚女                                                                                                                                                            | 八箇の少女                                                                                                                       |
| 八 強い酒  | 八塩折の酒                                                                                                                                                          | 八箇の酒                                                                                                                        |
| 九 籠囲   | 八谷峽八尾に度り                                                                                                                                                       | 八丘八谷の間に蔓延れり                                                                                                                 |
| 十 樹木   | 身に蘿と檜羅と生ひ                                                                                                                                                      | 松栢背上に生ひ                                                                                                                     |
| 十一 目の色 | 目は赤加賀智                                                                                                                                                         | 眼は赤酸醬                                                                                                                       |
| 十二 溶融  | 腹は血爛れ                                                                                                                                                          |                                                                                                                             |
| 十三 浮游物 | 簀流れ下りき                                                                                                                                                         |                                                                                                                             |
| 十四 刀剣  | 御刀の刃毀け                                                                                                                                                         | き剣の刃少し欠けぬ                                                                                                                   |
| 十五 分捕品 | 草那芸の大刀                                                                                                                                                         | 草薙の剣                                                                                                                        |



八俣の大蛇

以上のように、記紀の表現には多少の相違があるが、内容は同じ事柄を述べている。

一の、登場人物は天つ神、国つ神で天孫族と出雲族を代表する人物であること。

二の、場所は現在の島根県斐伊川の上流で、古来砂鉄製鉄が盛んに行われた地域であること。

三の、身一つというのは、八匹ではなく一匹である点、胴体が一つであることは団結力が強くて一本に結束して行動するものの意。

四の、高志は出雲国の古志郷説もあるが、越前国で、能登半島と朝鮮は接近していること。

五の、おろちの来る時期が年毎で、毎年定期的に渡来する季節の出稼ぎ集団であること。

六の、頭と尾とが八つあるのは、砂鉄製鉄たたら、(1)村下(職長)、(2)炭坂(副職長)、(3)火焚(燃料係)、(4)手子(炭焚の助手)、(5)番子(踏輪送風係)、(6)銅造(碎鋼選別係)、(7)鉄穴師(砂鉄採集係)、(8)山子(炭焼)、の八種の役職に相当し、一団の生産組織であること。

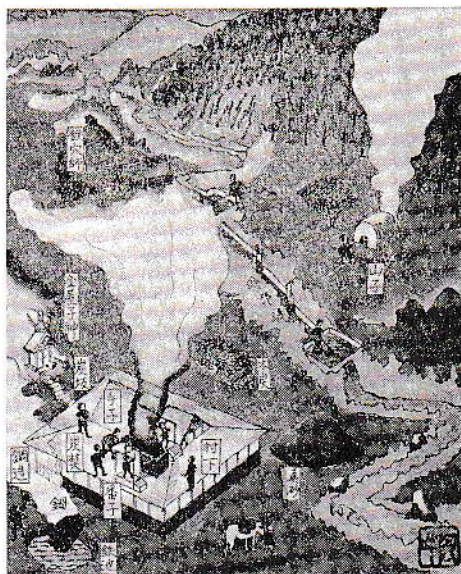
七の、乙女を要求するのは男性であること。

八の、強い酒を好むのは精力的な男性群であること。

以上の理由を述べよう。

『古事記』と『日本書紀』を比較し特記すべき項目を上げると、





踏 鞴

九の、八谷八尾は砂鉄、木材、水流のある山々谷々を働きの場所としてのこと。

十の、樹木は檜、杉、松、楓で砂鉄製鉄に必要な木炭の原料であること。

十一の、目の色が赤いのは、熔鉄の焰に該当すること。

十二の、腹が爛れて血の流れているのは、鉄の熔融状態を表わしていること。

十三の、箸が流れて来るのは、鉄穴流しの流速を計る手段と見られること。

十四の、命の佩っていた御刀の刃が欠けたのは品質が劣っていた証拠。

十五の、分捕品の尻尾から出て来た草薙の剣は、やまたのおろち

が所有していた優秀な鋼鉄製の剣であること。

右の十五項目について神話の内容を分析した結果、たたら説以外では説明がつかない。やまたのおろちの謎は、村下以下八職種から成る踏鞴師の集団が、多量の木炭を燃料として水流を利用して、山腹を切り崩した砂鉄から良質の鋼鉄を生産した経緯を、興味深い怪物物語に託して伝承した貴重な鉄文化の文獻を見ることが、初めて理解することが出来るのである。

### 一つの地名たたら

大鋸だのこという所がある。何か曰くがありそうな地名なので、踏査した。静岡県安倍川の西岸の支流丸

子川のそのまた支流の清流に沿って、谷間の部落をさかのぼって行くと、水上に不動の滝が懸っている。その辺一帯が大鋸で、三方は急斜面の山林に囲まれ、昭和四十四年に横穴式石室古墳が二カ所発見されているから、約千三百年前に既に古代人が居住していたのだろう。

この附近には丸子城趾を始め砦の跡が多く散在し、細工所および兜という部落があり、刀鍛冶師大村加下が出ており、今は絶えたが刀鍛冶大字屋があったなど、特異な地名と照し合せて、砂鉄製鉄に関連のある地名たたらの一つであろうと推定される。

柳田国男著『地名の研究』に、「語源不明なるタタラ」という語が書紀編修の時代すでに踏鞴という物にあてられており、しかもその語が半島より輸入した者と推測せらるることは、この地名が古く周防・長門・筑前・相模・安房などの海辺に存した事実と合わせて上代鍛冶刀工芸発達の道すじを語るものではないかと思う」と全国二十カ所を列記し、本文中に四ヶ所を挙げています。しかし、その中に大鋸は含まれていないので、改めて全国的に同系の地名を蒐集して現在合計四十五カ所になった。

古文書に地名たたらがあっても必ずしも存続しているとは限らない。例えば、『地名の研究』に「筑前糸島郡怡土村大字川原には東踏鞴・西踏鞴という地があつて、その辺の田を耕せば往々にして鉄屑が出たという」とあるが、福岡県前原町役場の教育委員会から川原区長に調査を煩わしたが、現在では判らないとの返事であった。また同書の「筑前遠賀郡八幡町大字尾倉字多々羅」が地図にないので北九州市役所八幡東区役所で調べて頂いたところ、新日鉄八幡製鉄所の工場構内に編入されていた。

矢板市大字上伊佐野字踏鞴戸と変っている。「陸中裨貫郡内川目村字踏鞴野」は現在の鉦野。「上野群馬郡白郷井村大字中郷字鉦沢」は「群馬県北群馬郡持村鉦沢」となっている。このように、古文書にある地名は変遷消滅しつつあることが判る。

地名たたらは殆ど小字であるために、二万五千分の一の地図に必ずしも記入されていない。地名たたらで地図に載っているものは四十五中二十七で六〇%、載っていないものが四〇%である。国土地理院に、もう少し詳しい一万分の一はないか聞いたら、二万五千分の一と五万分の一が最も利用価値が高いので、一万分の一は作成しないとのことだった。地図に記入されていない場合は、在りそうと思われる周辺の地図を市町村役場に送って、地名たたらの該当地域を記入して返送してもらって、確認し得たものが合計四十五ヶ所になった。地名の調査は無限に続く作業なので、一応ここで打ち切り、蒐集したものを南から北へ、県別に列記したのが次表・地名たたらである。

### 地名たたら

- 1 鹿児島県鹿児島市下福元町多々良







り進んでいたに違いない。人類の歴史は鉄の歴史であると言われている。古代文化が鉄文化に支えられて発展したとすれば、地名たちの路線をたどることによって、古代文化の進展経路の解明に役立つものと思われる。

たたらは外来語の可能性が濃いの、国外に目を転ずると、朝鮮任那の多々羅、ソ連領のタタール海峡、ロシア連邦共和国のタタールスク、タタール自治共和国を見出す。これらを線で結ぶには、点の数が少ないので路線の想定は困難であるが、地名たちのルーツを探索する場合のデータとなるであらう。

大鈿は地名たちの遠征路線上に乗っていた。登呂繁盛時代から戦国時代を経て、徳川家康駿府築城にいたるまで、その地域的鉄文化の中心として栄えていたかも知れない。大鈿の源流をたずねれば出雲国、朝鮮半島、シベリヤへと続いている。

一つの地名によって、文化発展研究の一助ともなり得る。地名の意義もまた重要な無形の文化財であるから安易に廃止変更されないことを切望する。

## 原点に帰れ「江の島会」

朝からの悪天候に参加人数の程が案ぜられた「江の島会」の新年懇談会が去る二月廿六日(日)正午から例の江の島「恵比寿屋」(35期永野清氏経営)で開かれた。

「江の島会」をこよなく愛している十五名の同窓が小雪交じりの氷雨を衝いて集まった。42期の森嶺氏は遠路静岡から又52期の相島秀夫氏は脚を痛め寒気には特に難儀する中を押して出席されたのには頭が下がった。参会者は上記三名の外に42期の井出多米夫、岩崎康、村松直51期の佐伯正剛53期の月見里得知郎57期の岩井平一郎、長田栄59期の内田武男、奥沢徹68期の関口登69期の紅一点松島玲子70期の吉田修の議氏であった。

そうでなくても明かるく楽しい「江の島会」の面々が却って落着いた雰囲気の中で、新年懇談会の名にふさわしく底抜け愉快に歓談して友情を深め合った。またたぐ間に数時間が過ぎてしまったが、積雪による交通の混乱の心配が無ければいつ実が果てるやも知らなかったであろう。

それはそれとして、長時間ただ漫然と談笑にのみふけた訳ではない。一番肝心な「今後江の島会

は如何にあるべきか」の命題もちやんとやってのけている。つまり結論的に言えば、「江の島会」原点に帰れ!」と言うことなのである。これについては若干補説の要がある。

そもそも特異な存在である「江の島会」には三つの顔が有る。発足以来現在に至る歴史の順に挙げてみよう。

(1)もともと「江の島会」は、神奈川県下に在住・在勤する同窓の有志を主体として誕生したが、会の趣旨に賛同する同窓はたとえ県外であろうが正会員として同列に遇している。(「江の島会」規約第四条——発足以来そうなっている。この点の特異なのである)しかもこの会は実に三十六年に渡る実績を積み上げている。

(3)関東広域支部が出来ると同時に江の島会員中の神奈川県内の同窓は当然それに所属する訳で、従って「江の島会」自体も切っても切れない密接な関係が生じたのである。

(3)本部から補助金が交付されるようになってから(第一回目は直接本部から、第二回目以後は関東同窓会を通じて)多年の実績評価の下に一つの支部として認められた結果となり、当然責任もまた重

くなった。

さて以上(1)(2)(3)のからみ合った「江の島会」の性格と位置づけは複雑であるが、特に(3)からは運営上困難な事情が経理の上で生じている。即ち支部ともなると「相互の親睦と本部事業への協力」の趣旨の徹底や総会等の通知を単なる有志にのみ限る訳には行かない。さりとて七百数十名に流すには補助金をもつてしても無理であり、

実際問題として出席者は割に満たないのであるが、その不足分を熱心な出席者にかぶせる訳にはもちろん不可である。それに返信さえいただけない三百余名に迄出さねばならぬと考えものである。それならば、やれ入会金、通常会費、維持費をといても考えられるかも知れないが、それこそ「屋下屋を架す」という愚案になってしまふ。そこで結局上記の如く「原点に帰れ!」となる訳である。つまりたとえ小人数であろうとも、真に「江の島会」を愛する同志会員の強い絆によってのみ「江の島会」は維持存続されると言うのである。いづれこれは今年度の総会によって決定される事であるが、紙面をお借りしてその総会のご案内に代えさせて戴くことにする。

昭和五十九年度総会ご案内

日時—九月二日(日) 正午から

場所—江の島恵比寿屋旅館  
会費(写真代・雑費を含む)

男子—七〇〇円

女子—五〇〇円

申込先—〒251 藤沢市鵠沼花沢町5の17村松方「江の島会」本部  
(TEL:046(26)二三三八)

## ゴルフ

去る五月七日、既に初夏の日ざしがまぶしい東名CCにおいて、第十六回叩高会ゴルフ大会が、宮澤会長はじめ十名参加のもと行われました。

今回特記すべき事は、荒谷女史(68期)が、ドラゴン確定と思われた、奥沢氏(59期)を抜く事五ヤード(ただしレデステイ)堂々ドラゴン賞に輝いた事、申告ハンデ12の北里氏(43期)が、41・43NET72で、ベスグロに輝いた事です。

競技の結果は次のとおりです。

優勝 奥沢 徹氏(59期)  
準優勝 北里良夫氏(43期)  
第三位 荒川秀子氏(ゲスト)

(67回幹事記)



## メダカの学校の優等生たち

芹 沢 正 憲 (43 回)



父を始め家財道具など、一物を余

さず灰燼に帰した。そのわが家に

して見れば奇跡的な発見でもあろ

う。美しい旋律の宿る香り高いロ

マンのような、この一葉のスナッ

プよ、ようこそご参なれとばかり

憑きものでもしたように、じっく

りみつめれば、登場人物、殊に中

央テンプルに手を置いて、この日

折悪しく眼疾でも思っておられた

のであらうか、そのためわれらの

脳裡に刻み込まれている、静中一

のダンディな教師のイメージを損

ねかねないようなお気毒な姿、白

黒の眼帯をされた級監の沢本先生

の英姿がクローズアップされてい

る。先生を軸として放射状に円陣

を作っているのがわがクラスメー

トのなつかしいあの顔の顔。目

をつむって来しかたを思い返すと

それぞれ友との出合いの瞬間な

どが浮かんでくる。すでに三分近

くの物語者を出し、存命者中にも

人生航路のすれ違いで巡り合うチ

ャンスがなく、一別以来このモノ

クロ対面が正に半世紀ぶりという

わらべ顔も交じっている。ちょー

クで書かれた黒板の中学生離れの  
した達者な筆跡なども引用して勘  
ぐれば、いまからざっと六十年前  
のわれら五年丁組一同の卒業記念  
のメモリアル・スナップであるこ  
とに間違いない。

この被写体の背伸びもなければ

気取りもないヤングの中には、両

手で指折り数え切れない刻頭の友

も見えるが、この後一兵卒として

戦場に駆り出されて大陸の荒野で

華麗な落日を見て、この日出づる

国をユメ没落はさせじと戦を決し

て敵陣に突入、あたら散兵戦の花

と散った友の顔もある。また奇跡

的とも言える倨傲な宿命に耐えて

生還はしたもの、われらを持つ

ていた祖国は、敗戦の傷あとと飢

餓地獄の渦中に悶えていた。次か

ら次へとよくもこう貧乏クジばか

り！と半ばベソをかきながらも傍

観は許されず、祖国再建の旗印を

高く掲げて、この壮大なロマンへ

の挑戦こそ男の生きざまとひたむ

きに走りつづけて、ナイナイづく

しのヤミ市経済からついに祖国を

GNP世界ナンバー2の経済大国

にまで仕立て上げた。その超人間

的な努力！ 例え、そのはしくれ

を担っただけとは云え、そこには

花も嵐も踏み越えてきた男の花道

と逞しい足跡が刻まれていた筈で

ある。その源流を尋ねれば、この  
若き日の幻影こそ、正しくその原  
点なるものであらう。

ここに李白の名比喩を借りて、

銀鞍白馬に跨って颯爽と春風を渡

った美少年揃い！と声高に賛めち

ぎつても、われらはなお賛め足り

ないと思うのだが、天にまします

蜜神さまはとかく焼きもち焼きな

のか、途端に意地悪なカミナリを

落とされる。曰く、美少年揃い？

ウスボレもいい加減にせい！ 純

情無垢な中学生揃い！ 嘔わせる

なよ。おへソが茶をわかすワイ。

えらくひねたオジンも交っている

ではないか。図星をさされてじっ

くり見直すと、お仰せのように、

先生の直前から右手前にかけて屯

ろしている中学生らしからぬヒネ

タやんちゃ坊主共、欲求不満のハ

ケ口を求めて学校暴力のアラシと

なっているにも吹き荒れんとして

いるような不敵な面構えの面々、

その最前列の真ん中にドカリと鎮

座して、ヒシヤクをもつてふてぶ

てしくもせせら囁っている奇怪な

男の子、その水のしたたるような

美貌のヤングが、かく申す筆者セ

リザワの君のやんごとなき姿で、

仲よくスクラム組んでいるのが、

莫逆の友、若槻の笑わん殿下であ

る。つらつらおもひみるのに、芹

## 日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩井 平一郎 (57回)

本社 静岡市国吉田645

TEL 0542 (62) 1111 (代)

東京 中央区京橋1-2 越前屋ビル

TEL 03 (272) 4651 (代)

## 話題のスペース

(明治通りと大久保通りの交叉点)

## レストラン・モア

小人数から30名様くらいまでクラス会等に最適です

土屋 晃 康 (67回陸上)

TEL 03-208-2931・204-1251

東京都新宿区大久保2-1-3



沢の君はこの日いかなる理由で貧乏世帯のシンボルのようなヒシヤクを持たねばならなかったのか。このヒシヤクは小黒板に記されている教室当番の清掃小道具でもあるが、芹沢の君のような高貴な膺が持つステータスシンボルとは凡そ縁遠いものである。なんで？と六十年前のタイムカプセルを蘇らせてアレコレ勘ぐってみたが、細く長い人生街道はこの何んで？の疑惑をヤマのアナタにかすませている。いづくともなく声あり、蜜神さまのスポークスマンでもあらうか。たかがヒシヤクじゃないか！そう目くじら立ててはじくるほどのスキヤンダルでもないだろう。ズバリ言えば芹沢の君がペラペラかなんげのように燃える尻軽男で、しかもたぐい稀なオッチョコチョイ！ぐらいに解説して置けば、当らずとも遠からずじゃないの。誰だ！出てきなさい。言論の自由をいいことに人権蹂躪的なダボラを吹くのは、国連に提訴しませうぞ。

な。いつも答案がウリ二つだし、ご丁寧にも間違い箇所まで仲よくドンビシヤリ！などと皮肉られたりした。雨の昼休みなどには、教室の机・腰掛けを片付けて、水をまいて下駄履きスケートを楽しんだりしたものである。それあるかな、二人の足元は草り履き。下駄履登校の栄ある証拠である。

勿頭の交りをつないでいた二人は、昼休みには教室をエスケープしてメルヘン街道沿いの山惣ソパ屋へ行くのが不可欠のスケジュール。メルヘン街道とは学校の寄宿舎裏通りの道のことでグリム童話のトリコになっている芹沢の命名であった。この街道が落ちこぼれ組の次から次へと繰り上げる悪戯の舞台となったものである。ソパ屋で貧乏官吏の伴の芹沢は金五銭のカケソバ、おんば日傘で育った豪農のおん曹子若槻は、金八銭の天南を注文するしきたり。ソバが運ばれてくると、若槻は天プラを千切つて、その切れはしを芹沢のカケソバの上にそとつけてくれた。芹沢は薬味のネギを仇のようにふりかけて、この友情あふるる『天南もどき』を美味求真の醍醐味として喉をグウグウ鳴らしながら嚥り込んだものである。素朴なソバをなかだちとしていよいよ高め

られるわれらの友情！よき時代ではあった。

その若槻の笑わん殿下も残念ながら早逝して、やがて十年目の命日を迎えようとしている。嗚呼！

『こえ』

37 三輪 清三  
私は昔の甲種合格であったが、昭和十二年八月上海戦をはじめ支各地を転戦、昭和十九年には又独立歩兵大隊付軍医として静岡連隊から南方へ出征したが、二十一年無事帰還、大学教授停年退職後今でも診療を楽しんでいる。専門は内科、極めて健康である。

40 小室 敏一  
小室敏一儀、去る五十八年十一月二日、心筋梗塞にて死去致しました。生前中は大変お世話様になりました。御交誼を厚く御礼申し上げます。五十八年度分年会費お送り申し上げます。よろしくお取はかりお願い申し上げます。皆様に宜敷御伝言下さいませ。

妻 小室千代子  
42 菊地 謙雄  
会報で皆様の楽しそうな記事を読みます。健康には恵まれています。先約があつて機を得ません。

甲子園優勝旗の記念の旗を頂きに朝日新聞社に参り皆様とお会いしたままで失礼しています。又よい折りに御拝眉を期待します。

43 吉江 誠一  
静中には僅か一年の在学中で、当時の陸軍幼年学校に転校してしまつたのですが、爾来六十年未だに「岳南健児」の校歌を忘れないのは不思議でなりません。老馬ながら自分ではあくまで駿馬と思つて元気で頑張っています。

45 伊藤 敬三  
名簿訂正依頼。四〇回卒業の伊藤哲三は五十七年七月五日死去いたしましたので削除願います。遺族の手違いで連絡出来なかつたことでしょう。小生は弟です。

45 蝦原 一郎  
身体不調のため会に出席できず申し訳ありません。

51 山本 俊朗  
お蔭様で元気で勤務して居ります。

51 佐伯 正剛  
会員の皆様には相変らず御元氣のこととお慶び申し上げます。日頃は御無沙汰ばかりで失礼しております。実は十二月から東京本社勤務となりましたので、今後は会員の方々とお会いできる機会が多くなることを楽しみにしております。

て治療を受け、平静を得て居ります。

50 田中 誠  
私は静岡県人ではない。しかし学校は全部静岡県なので、「お国は」と聞かれると静岡だと答えることにしている。旧制浜松高工卒業、学校が氣を利かせて、本籍川崎にある東芝に推薦された。浜松で手解きされたテレビが生涯の仕事になり、今でもこれに携わっている。

51 下山富太郎  
現在は会社をリタイヤーして、シヤム猫の改良をして居ります。

52 今井 健三  
相変らずキャノンの関連会社へ常勤顧問として出勤しています。

52 一 誠  
従来通りで変更ありません。



54 山口 道也  
大変遅くなりましたが年会費送金します。小生その後元気でやっています。

54 安東 哲夫  
建設業界としては誠に厳しい年を迎えましたが、会社としてはTQCによりその体質も強化すべく私はその推進担当として頑張っております。昨年は孫が二名増え七名になりました。諸兄のご健勝とご多幸を祈ります。

(住友建設株式会社勤務)

55 山本 孫一  
長男均23才東芝ケミカル勤務。次男学25才住原製作所勤務。三男亘22才歯科技工士、更に専攻二年間を在学中。皆独身、目下両親と同居(横浜鶴見)。

氣立てのよい静岡のお嬢さんに関する情報ありましたらお願いします。

55 野中 篤  
同窓会に関し種々御世話になり厚く御礼申し上げます。御無沙汰していますが、諸兄に宜敷く御伝えています。

56 中村 治郎  
いつも御世話様になっております。昨年七月より株式会社ケーJ1ファインランスという会社を設立し代表者となっております。今後

共よろしくお願い申し上げます。お蔭様で、元気に勤めて居ります。

57 鳥居 義彦  
御無沙汰いたしておりましたがやっと皆様のご消息伺えるようになり喜んでおります。

58 服部 健一  
五八年度末は欠席しましたが次回はお出向の積り、来年(五九年)は六回目の子年です。

59 関 寛治  
二年分会費お送りします。昨年はアメリカにおりましたので失礼致しました。

61 安原 徹治  
年末をもって新日鉄を定年退職し、系列の某社に再就職の予定。久しぶりの東京勤務となります。某社は追って通知します。なお、住所変更しました。

「東京都世田谷区上北沢一の七の六」  
某社とは「三菱金属工業株式会社」です。

67 向井 久和  
年会費を納入します。おくれで申し訳ありません。

67 松本 安子  
納入おそくなり申し訳ありません。今日引出しより出て来まし

た。二月はスキーに夢中になって居り、三度程出かけてやっと落ちつきました。

68 雨宮 明生  
会費納入遅れて申し訳ありません。よろしく、どうぞ。

68 林 明宏  
幹事の皆様お世話になります。今後共どうぞよろしくお願い申し上げます。

70 石山 宏  
大変御無沙汰致しております。今後は万障繰合せて各種催物に参加させて戴きます。現在田辺製菓東京支社に勤務致しております。会費は58年59年度分とさせて下さい。

70 岩崎 修  
70期ですが、卒業が病で一年おくれだったので71期で卒業しました。なお東京で仕事をすることが多いので、静岡の住所ですが、ひきつづき関東同窓会に留りたいと思います。又70期と行動を共にすることが多いのでよろしく。職業は弁護士で東京の連絡は電(354)9661

71 秋田 和男  
送金が遅れまして申し訳ありません。よろしくお願致します。

81 芝山 公彦  
いつものことながら、年会費納

入遅れて申し訳ございません。役員の方の御苦労に感謝致します。

97 牧野 徳也  
仕事が忙しく、同窓会に参加できなく申し訳ありません。現在ソフトウェア会社の処理部門に於てデータ及びプログラムライブラリーの管理という業務にたずさわ

元気にやっております。

97 杉本 文秀  
遅くなって申しわけありません。近頃はサークル活動に忙しい日々をおくっております。

五八年度会費提出者

(五十九年三月三十一日まで)

- |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |              |                   |              |                 |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|--------------|-------------------|--------------|-----------------|
| 二六 土屋正三 | 二九 鈴木鋭児 | 三〇 神谷啓作 | 三二 前田鉄三 | 三三 幡野儀作 | 三四 嘉悦一郎 | 三五 福田 功 | 三六 伊達慶郎 | 三七 三輪清三 | 三八 本多 峻 | 四〇 杉本四郎、小室敏一 | 四一 鈴木 篤、伊藤顯信、三宅泰雄 | 四二 菊地謙雄、高塚嘉一 | 四三 芹沢正憲、吉江誠一、三宅 |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|--------------|-------------------|--------------|-----------------|

同窓会コンペなど、ご相談ください。

伊豆大仁カントリークラブ  
伊豆大仁開発株式会社

代表取締役 石 橋 正 秋  
取締役支配人 安 田 正 弥 (66回)

静岡県田方郡大仁町浮橋字南松坂1198-1  
TEL 0558-76-2401 (代表)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科  
人間ドック

ねつ かん  
熱 函 病 院  
院長 小 坂 博 (67回)

住 所 熱海市春日町12-2  
TEL 0557-83-3131



- 四四 静雄、長戸寛美、柳沢保雄  
増井三郎、小沼武、中村  
満夫、松下清夫、鈴木進  
四五 柏木千秋、速水基夫、伊藤  
敬三、黒田明彦、蝦原一郎  
四六 田中修三、長浜謙二、青木  
清明  
四七 後藤卓郎、鍋田康、嶋谷  
亮一、海野敦  
四八 北村三朗、高須寿、堀  
正典  
四九 上杉一郎、石割敏夫  
五〇 丸尾文治、梅村魁、二科  
義郎、山田喜志夫、山本  
浩、田中誠  
五一 渡辺功、佐伯正剛、山本  
辰男、山本俊朗、下山富太  
郎、玉越俊一、蘆田正之、  
福永英武  
五二 弓削恒、岩本良雄、今井  
健三、為田清②、新美  
弘、一誠、渋谷正敏  
五三 香林竹男、宗像醇、望月  
昂、大橋百蔵、片桐鎮夫、  
鈴木弘雄  
五四 渡辺治郎、安東哲夫、山田  
幸作、大畑忠夫、黒岩勇三  
五五 福津三朗、山口道也  
木村康弘、吉川鍬介、佐野  
修也、野中篤、堀江重遠  
相馬英夫、山本孫一  
五六 杉原泰二、伊藤象一、原田  
昇左右、石塚由雄、中村治  
郎、山口弘  
五七 島根光明、久保田誠三、森  
下恒彦、望月修、鳥居義  
彦、小幡真策、渡辺武男、  
広野暢之、小坂志磨夫  
五八 服部健一、沢西浩、安井  
幸一、岩本忠吉、小山昂之  
伏見祐一、萩原義臣、猪瀬  
忠賀、海野進、天野国明  
藤田登、伊藤健三、向井  
晃  
五九 小花敏郎、寺尾宏一郎②、  
内田武二、伊藤光雄、清水  
汪、青木静男、福原元一、  
青木豊、酒井勇、大村  
和夫、原淳、望月靖久  
曲淵景敏、関寛治、朝比  
奈正二、富永利夫  
六〇 鈴木正巳、鈴木明、服部  
昌夫  
六一 宇都宮道和②、赤羽昭二、  
中尾昭、末吉晴夫、長瀬  
脩、大村富士男、鈴木孝  
奥野泰助、富永辰典、安原  
徹治、萩原将弘、竹迫友一  
深井晏  
六二・六三 寺尾寿夫、河合卓  
海野昭平、井出義光、鈴木  
市三、真田宗明、大石一輔  
荒浪直彦、白鳥芳夫、鈴木  
新之輔、北堀勝雄、遠藤良  
司、浜田隆郎、稲森茂、  
大沢三朗、高田桂造、深見  
一正  
六四・六五 仲野実、栗田行雄  
山本和彦、秋山知賀三、大  
村達郎、望月康逸、稲見  
章、小林剛  
六六 小林五郎、尾入泰彦、曾根  
錦吾、菊田聡裕、杉本幸貞  
小嶋清司、大村敏夫、村松  
武司、山下裕一、関本和男  
山本俊夫、岩堀行宏、佐野  
辰美、海野裕男  
六七 朝倉勇、吉野亨、増田  
安国、松本安子、向井久和  
小杉謙一、大森恵吉、稲川  
雅久、滝川博、手塚重明  
長倉孝三②、河口正義、影  
山友安、黒石聖一、鈴木敏  
行戸塚惣雄  
六八 吉崎英輔、河口浩、杉山  
忠男、市原卓、雨宮明生  
伊月喬、亀山恭一、額額  
晃生、稲葉清、小林功典  
赤松靖弘、田中英夫、林  
明宏  
六九 八木義弘  
七〇 渡辺勝美、松山多美、西山  
信三、小嶋国彦、小佐野栄  
雄、石山博、河井良夫、  
小山清継、森野寿美子、白  
石通子、大野幸男、鈴木
- 清、石本明、山本正夫、  
岩崎堅司、吉田修、鈴木  
文一郎  
七一 岩崎修、谷津正次、酒井  
力、加藤祐史、片山嘉博、  
関本光宏、相川東一、秋田  
和男、渡辺雅俊、村松綴啓  
渡里彰、白井力、森川  
滝太郎、的場徹、前田利  
男、岩崎謙一郎、松井正年  
野崎正  
七三 望月公美、青木俊一郎、加  
藤元彦、西田和子  
七七 加藤重信  
八一 福世一己、日比野彰子、鈴  
木真男、嶋田政子、川田千  
代子、竹内尚興、芝山公彦  
梅沢浩二、影山勝一  
八七 薬科名雄、橋村芳一  
九六 片山麻子、清水寿子、神戸  
清雄、森康子、速水寿文  
九七 沢沢富美子、中村和子、内  
田雅彦、杉本文秀、白鳥孝  
明、牧野徳也

## 計 報

型絵染の人間国宝

芹沢銈介氏(28期)が逝去

59年4月5日、心不全のため虎  
の門病院で、八十八歳の生涯を閉

じられた。国際的にも高い評価を  
受けた大先輩、心から哀悼の意を  
表したい。

百年祭に特別制作の記念品が配  
布されたことは記憶に新しい。

葬儀・告別式は日本民芸館葬  
(葬儀委員長は同館長の柳宗理氏。

喪主は長男長介氏)として、4月  
26日に執り行われた。

訪静の折には、登呂にある市立  
芹沢銈介美術館を訪ねて、芸術の  
香り高い、偉業の数々にぜひ触れ  
たいものである。

## 新東京印刷株式会社

代表取締役 梶原由三 (67回)

東京都中央区八丁堀2-1-7

神鋼ビル

TEL 03-553-8981 (代表)



## 鈴 与 株 式 会 社

取締役会長 鈴 木 与 平 (44回)

清 水 市 入 船 町 11 - 1

TEL (0543) 53-3111 (大代表)

## トッパン・ムーア株式会社

取締役社長 宮 澤 次 郎 (42回)

東京都千代田区神田駿河台1-6

TEL (295) 2411 (大代表)

## 凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1

TEL (833) 2111 (大代表)

## 株式会社 講 談 社

取締役名誉会長 野 間 省 一 (44回)

東京都文京区音羽2-12-21

TEL (945) 1111 (大代表)

## 株式会社 東 電 社

取締役社長 岩 波 信 平 (42回)

東京都中央区日本橋2-1-21

TEL (271) 2701 (大代表)

## セリ企業グループ

代表者 芹 澤 正 憲 (43回)

佛 銀座 瀬 里 (573) 4031~3

佛 セリ・エンタープライズ(574) 7295~6

佛 タカ・セリ (572) 6881~2

佛 ニュー・セリ (571) 4588・6255

佛 セリ・プレイング・マシン(462) 38-0571 (代)

川 根 銘 茶

## 三保乃園 山 菅 茶 店

山 菅 章 雄 (53回)  
(村 松 正 七)

東京都港区南青山1-20-6

TEL 03-403-5760

## 本田技研工業株式会社

川 島 喜八郎 (52回)

東京都渋谷区神宮前6-27-8

TEL (499) 0111 (大代表)

建築設計・監理

## 株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥 野 孝 (53回)

取締役社長 奥 野 進 (56回)

取締役副社長 奥 野 広 (58回)

本 社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル

TEL 03-842-6831 (代表)

静岡事務所 静岡市安東2-8-14

TEL 0542-46-9378

建築コンサルタント・設計施行業務

建築に関する御相談は御気軽に……

## 株式会社 大 雄

取締役社長 奥 野 孝 (53回)

本 社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階

TEL 03-834-5331 (代表)